

2011年は「世界化学年」

International Year of Chemistry 2011

西出宏之

Hiroyuki NISHIDE

(世界化学年日本委員会実行委員長
早稲田大学先進理工学研究科教授)

キュリー夫人のノーベル化学賞受賞から100年目に当たる2011年を「世界化学年」(International Year of Chemistry 略 IYC2011) とすることを2008年末に開催された国際連合総会は決めました。これは日本学術会議化学委員会が国際純正・応用化学連合(IUPAC)からの呼びかけに賛同し、化学委員会IUPAC分科会とともに、わが国が共同提案国として国際連合教育科学文化機関(UNESCO)に働きかけ実現したものです。2011年はまた、IUPACの前身である国際化学会連合(International Association of Chemical Societies)が設立されて100年目にも当たります。

世界化学年の統一テーマは、“Chemistry—our life, our future”です。「化学に対する社会の理解増進」「若い世代の化学への興味の喚起」「創造的未來への化学者の熱意の支援」そして「女性の化学における活躍の場の支援」を目的に掲げています。(IYC2011 ホームページ <http://www.chemistry2011.org/>)

これまでわが国におきましては、高分子学会はじめ化学関係の学協会・諸団体、大学や企業がすでにこの趣旨・目的に沿った活動を長年にわたり地道に積み重ねてきております。これらの事業を継続発展させるために、「2011年を化学の年」として、化学のいっそうの振興と社会への幅広い普及・啓発・人材育成に当たるべく、野依良治委員長のもと「世界化学年日本委員会」が昨年8月に発足しました。

事務局は日本学術会議化学委員会(IUPACに対する日本代表機関)の付託により、日本化学連合(御園生誠会長)に置かれ、同じく協力要請が高分子学会はじめ化学系学協会になされました。(一般社団法人)日本化学連合は岡本、澤本、安部歴代会長らが参画して2007年設立の化学系学協会の連合体で、加盟団体17学協会、会員数は重複を除いて約8万人(<http://www.jucst.org/>)。化学者コミュニティの考えを、社会に対しまして会員に対して発信しています。科学技術政策、たとえば、いわゆる仕分けへの意見、地球温暖化対策における科学者の責任、若手人材の育成への

提言などです。世界化学年では、22の化学系学協会事務局との連絡会をもち、協同しています。高分子学会、化学系学協会および日本化学工業協会・産業界の、趣旨に沿った諸事業を「世界化学年」の旗の下にとりまとめ推進する計画です。

IUPAC主催の開会式(1月パリ)、全体会議(8月ブルトリコ)、閉会(12月ブリュッセル)などとも連動して、昨年12月のカウントダウン記念シンポジウム(東京)、PACIFICHEM(ハワイ)での発足レセプションに引き続き、3月末の日本化学会年会(神奈川大)では公開シンポジウムなどが開催されます。例年より充実した夢化学21「夏休み子供化学実験ショー」(7月末、予定)はじめ、それぞれ工夫した賛同の行事として、各学協会が市民講座や実験教室などを企画しており、世界共通ロゴを冠して広報も始まっています(問い合わせ、行事登録 <http://www.iyc2011.jp>)

IYC2011年記念として新しい事業も企画されています。「キュリー夫人科学伝記」から小・中学生に人間としての生き方を考えてもらう読書感想文コンクール、啓発活動・情報発信を通して「化学」に対する社会の理解を深めることに貢献した個人・団体を表彰する「化学コミュニケーション賞」の新設、化学の実験や現象を展示するコーナーを科学館に設けてもらう「見せる化学・魅せる化学(仮称)」(日本科学未来館ほか)などです。

「世界化学年」事業を通して、わが国の科学・技術がいっそう振興し、持続可能な社会を支える人材の育成と教育の増進が図られ、2011年がわが国の力強い将来に貢献する輝く「化学の年」となることを願って日本委員会は活動を開始しています。



International Year of
CHEMISTRY
2011